

(「学界展望」)

アナール学派の家族史研究

有地 亨

「アナール」(Annales)の名で知られるアナール学派の創設は一九二九年にまで遡り、リュシアン・フェヴルとマルク・ブロックの手で刊行された『経済・社会史年報』に結集した歴史学者、歴史民族学者、歴史人口学者の集団をアナール学派という。アナール学派は、従来、歴史は個々の政治上の事件や有名な政治家、将軍の行為によって綴られ、歴史をつくり出した民衆の生活を欠落していることを批判し、全体の視点から、民衆の日常生活の営みを捉え直すことを目指し、数世紀にわたる生活に密接した領域の諸問題を掘り起し、歴史を再構成しようとする。したがって、彼らの視野の中には、民衆の経済生活だけでなく、家族生活、性、犯罪、教育、疫病などの領域で、個々の人びとがなにを考へ、どのように行動したかまでが含まれることになる。

このようなアナール学派の家族史研究には一九七〇年代に歴史人口学や歴史民族学の研究成果が加えられ、一段の光彩を放つたとされる。アナール学派はこれらの問題について、今日保存されている教区簿冊、修道院寄宿舎の名簿、日記、回想録、教会に寄進された絵画などの諸資料について、画像学や服飾学などの手法まで用いて丹念に分析し、当時の家族像を再現するという方法を用了。

私が最初アナール学派の著名な家族史の著書を読んだときの感激が生まましく蘇ってくる。ジョルジュ・デュビイーの一九五三年刊行の『マコネー地方の十一・十二世紀の社会』を読み、当時の貴族階層を中心とした家族内、親族内の人間関係がヴィヴィッドに描かれているのに驚き、また、今日、あまりにも有名になっているフィリップ・アリエスの一九六〇年刊行の『アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』(杉山光信・恵美子訳『子供の誕生』(みすず書房、一九八〇年))の第三部の中世から現代までの家族史の分析に魅せられたのは一九五〇代の後半から六〇年代の初めであった。私は一九六六年にこれら二つの著書に導かれて、フランスの中世から今日までの家族観念の変遷をフォローしたことがあった(『家族制度研究序説—フランスの家族観念とその史的展開—』(法律文化社、一九六六年))。

このようなこともあって、一九七九年に、フランスの社会学者アンドレ・ミシュル女史の下で、フランス家族社会学を研究する機会をもった。その頃、アリエスは日本ではあまり知られていなかったが、かの地では、この『日曜の歴史家』が漸く学界に登場したところであった。私はアリエスの六〇年代、七〇年代の種々の雑誌に掲載された家族に関する論文を集め、読んでみたが、その多くが同じ主張を執拗に繰り返していることに、異端の歴史家が学界に迎えられるまでの苦渋の跡を垣間見る思いがしたし、また、いまだでは盛況を極めるがアナール学派のこれまでの歩みもそのようなものではなかったかと推測したのである。

「アナール」は一九七二年の四・五合併号と六号の一部を加え

て、『家族と社会』（*Famille et Société*）を特集し、二五本以上のアナール学派の家族、婚姻に関する論文が掲載され、まことに豪華絢爛である。アンドレ・ビュルギエールがその「序」の中で、歴史家はその宿命なのか、家族が崩壊ないしは危機に瀕するときに、遅ればせながら、家族を論じ、社会の発展の中で、その重要性に注目することを余儀なくされていると述べている。

私が今日もっとも注目したいのはジャン＝ルイ・フランドラン（Jean-Louis Flaudrin）の一九七五年と一九七六年の二つの著作である。『農民の愛——昔のフランスの農村の愛と性（十六～十九世紀）——』（*Les amours paysannes: Amour et sexualité dans les campagnes de l'ancienne France*（XVI^e-XIX^e siècle、Gallimard Julliard, 1975））と『家族——昔の社会の親族関係「家、性——」（*Famille: Parenté maison, sexualité dans l'ancienne société*, Hachette, 1976））とあって、前者は農民の家族生活、夫婦関係が今日理解されているものよりかなり異なっていることを諸資料から検証されているし、後者は一六～一八世紀の辞書、日記、回想録に用いられた家族、親族関係の用語からその意味を確定するもので、いずれも、日本を含む前近代の農民の家族生活があまり解明されていない今日の状態の中で、貴重な分析というべきであろう。

もっとも、アナール学派の家族に関する著書や論文のいくつかは今日では邦訳されて新評論から刊行されており、きわめて便利がある。前掲の『家族と社会』の特集のなかのいくつかの論文や『アナール』に発表された論文は、『家の歴史社会学』（アナール

論文選 2（新評論一九八三年））に収録されている。また、マルチヌ・セガレーヌ、片岡幸彦監訳『妻と夫の社会史』（新評論一九八三年）も出ている。一九世紀の農村の結婚、家族生活、夫と妻の労働などを諸資料により分析し、当時の農村の家族では必ずしも男性優位ではなく、女性の地位は今日よりも高かったとするものである。フランソワーズ・ルークス、福井憲彦訳『八母子』の民俗史（新評論一九八三年）、ジョルジュ・デュビー、篠田勝英訳『中世の結婚——騎士・女性・司祭——』（新評論一九八四年）、フィリップ・アリエス『教育の誕生』（新評論一九八三年）などがある。

アナール学派の家族に対する見方は、フランスでは普通考えられている以前から核家族が民衆では一般的で、従来のように、家族形態や家族規模の分析よりも家族内部の人間関係や意識の解明の方がより重要であるし、また、今日の家族感情や母性愛、婚姻観などはせいぜい、今日より二、三世紀前につくられた観念であることなどであるが、次第にその成果が明らかにされている。

なお、アナール学派の家族に関する研究動向については、二宮宏氏の「歴史のなかの『家』」（前掲『家の歴史社会学』所収）と福井憲彦氏の「家族の多様性——フランス家族史研究——」（『現代思想』一九八五年六号（特集『家族のメタファー』））に詳しく紹介されているので、参照を願いたい。

（九州大学・家族法、法社会学）